

北九州市立文学館友の会は詩人・宗左近（1919～2006年）の顕彰活動を行っている宗左近・花の会との共催で「宗左近・文学散歩 in 戸畑」を11月5日に実施しました。当日は19



人が参加。花の会の稲田大貴さん、大場健司さん、そして大川内が案内人となり、JR戸畑駅周辺の宗左近ゆかりの地を巡りました。

（友の会理事・大川内夏樹）

北九州市立文学館

# 友の会会報

第18号

2024年1月

## 宗左近の戸畑を歩く 世代を超えて小学生も参加



勝栄座跡地（通りの左側）①



旧・築地町二丁目の住居付近②



旧・金屋町二丁目の住居付近④



宗左近生家付近⑤



都島展望公園⑤



①～④周辺の地図

『炎える母』や『響灘』などの詩集で知られる宗は、遠賀郡戸畑町（現戸畑区）で生まれ、第一高等学校進学のために上京するまでのほとんどの時期を戸畑で過ごしました。今回は以下のコースを約3時間かけて、歩きました。

### ①勝栄座跡地

宗は、1927（31年頃）、父とともに自宅近くの旧・通町一丁目にあった劇場に通い、浪花節に合わせて役者が演技をする節劇などの芝居を約200回も観たそうです。この勝栄座（永楽座より改称）がその劇場であると考えられます。

### ②戸畑での2番目の住居周辺

宗は、1927年頃に牧山の生家から旧・築地町二丁目にあった住居に転居し、そこから戸畑尋常小学校に通いました。

### ③洞海湾の埋立地

2番目の住居に移ってきた頃、現在は一文字島竣工記念碑が立つ辺りの埋め立て地で、野外の映画上映会が開催されたことがあったようです。宗はそこで河童

会員の皆様の原稿を募集 好きな本や作家など、文学に関するものであれば内容は問いません。文学館や友の会に対する意見や提言もどうぞ。6000字程度で事務局までお送りください。

が人間になりかわる映画を観、その映画から受けた強い印象が、詩集『河童』『大河童』へとつながっていきます。

### ④戸畑での3番目の住居周辺

父の死後、宗は一時的に宮崎県の伯母のもとに預けられていましたが、1933年、母と兄が旧・金屋町二丁目に新たに構えていたこの家に帰ってきました。

### ⑤生家周辺と牧山船舶通航信号所

1919年、宗は旧・明治町六丁目のこの家で生まれ、牧山尋常小学校1年生の時までここで過ごしますが、家の周辺が道路の拡張工事の対象区域になったため、2番目の住居に移りました。また生家の裏山には船舶通航信号所があり、幼い宗はその信号所に掲げられる旗をよく眺めていたようです。この辺りは現在、都島展望公園になっています。

3面に続く

会員寄稿

### 平成中村座公演 夢のような1カ月 大石 寛子

4年前、平成中村座小倉城公演で、12歳の私は歌舞伎と出会った。女形の息をのむ美しさ、どんだん熱を帯びる立ち回り、役者と観客が織りなす一体感。こんなにすごい舞台芸術があるのかと、強い衝撃を受けた。

2023年11月、「北九州・小倉を元気にしたい!」という中村勘九郎さん、中村七之助さんの熱い思いにより、平成中村座が小倉の地に帰ってきた。待ちに待った小倉城公演。私は、夢のような最高の1カ月間を過ごした。

昼の部の演目は、義経千本桜 渡海屋・大物浦。壇ノ浦にもゆかりのある名作である。特に私が心を動かされたのは、典侍の局が大粒の涙を流しながら安徳帝に波の底にある都へ行くことを促す場面。そして、知盛が体に碇を巻きつけて



平成中村座前でポーズをとる大石さん

入水する場面である。役者さんが全身全霊で、時代に翻弄されながらも強く美しく生きる姿を体現していて、その姿に涙が止まらなかった。

夜の部、もう一つの演目は風流小倉。小倉城を借景にするという小倉ならではの演出に、観客も自然と心が躍る。

夜の部は小笠原騒動。これは、豊前小倉藩で実際に起こったお家騒動が基になっている。難しい話かと思いきや、観客が驚く仕掛けが随所にある。狐が出てきたかと思えば幽霊の宙乗り、役者さんが客席へ降りてくる演出、水車小屋での本水を使った立廻り、梯子を使った縦横無尽の大立廻り。歌舞伎を初めて観る人も絶対に楽しめる演出である。

大詰の立廻りは前回の公演よりも激しさが増し、スピード感や迫力に観客全員が圧倒された。時を超えて復活した狂言が、現代で役者の芝居となり、観客の心を打つ瞬間を体感し震えた。今回も熱狂と興奮に満ちた時間をくれた平成中村座。再び北九州に帰ってきてくれることを心から願っている。

若松出身の芥川賞作家、火野葦平が1954年、米軍占領下の沖縄を旅した際に撮影されたネガフィルム311コマが、北九州市立文学館に保管されている。その全コマが琉球大教育学部の小屋敷琢己教授により昨年デジタルデータ化され、鮮明なプリントとしてよみがえった。

この年、葦平は沖縄便就航に伴い日本航空から招待され、2月8日から1週間、沖縄に滞在した。フィルムには那覇を拠点に南部戦跡や北部の農漁村を巡り、地元文化人と交流した様子が記されている。特筆すべきはやはり、沖縄で戦死した末弟・千博の慰霊のために訪れた南部戦跡の写真だろう。「ひめゆりの塔」前での葦平の表情は心なしかこわばって見える。後のエッセー「新琉球記」で葦平は、この時の心境をこうつぶつている。



ひめゆりの塔を訪れた葦平

### 文学館探訪 火野葦平の沖縄旅行のネガ、プリントに



組踊の名優、真境名由康(右)と葦平

この旅で葦平は、米軍支配の過酷さを見聞し、その実態を戯曲「ちぎられた縄」で全国に発信した。博物館と言えは展示会の開催に目が向きがちだが、今回のプリント化は資料の収集保存というもう一つの博物館の役割を認識させてくれた。プリントに、当時の葦平の取材メモや作品を付せば、興味深い企画展が開けるのではないだろうか。

(友の会理事・伊藤和人)

※写真はいずれも小屋敷琢己・琉球大教授提供、北九州市立文学館所蔵

映画と文学

### 「小倉昭和館」待望の復活

### 再生までを追った書籍も刊行

2020年8月10日、北九州の巨過市場で起きた火災により焼失した小倉昭和館。2023年12月8日にプレオープン、12月19日にランドオープンと、ついに待望の復活を果たした。

火災前は、北九州市立文学館をはじめ、市立美術館、漫画ミュージアム、いのちのたび博物館、松本清張記念館などで行われる企画展に合わせ、関連作品を上映。文化芸術と映画のコラボレーションを図ってきた。作家の村田喜代子さんや葉室麟さん、田中慎弥さん、文学館の今川英子館長といった文学に関わる人々が昭和館のステージに登壇し、トークショーも行ってきた。



プレオープンの日、来館者を笑顔で迎える樋口館主



ステージに立つ光石研さん（左から2人目）ら

3代目館主の樋口智巳さんは友の会の理事も務め、この会報にも「映画と文学」をテーマに度々寄稿してもらっている。文学館の友の会の会員にとっても関わりが深い存在、それが小倉昭和館だ。

いつもの場所に行けば、いつもの通りに館主が笑顔で迎えてくれ、映画を見て独り時間を過ごす。当たり前すぎて見逃してきたことすべてが大切なことだったと、小倉昭和館を失って気付いた。

火災後、すぐに昭和館のファンがつくる「シネクラブサポート会」が署名活動を始め、最終的に再建を求める署名1万7152筆が集まった。秋が冬の背中をくすぐり始めた2022

2年11月27日、火災後初めて行われたイベントで「福岡県内に現存する最古の映画館として、映画の街・北九州にある映画館として、復活したいと思います」と樋口館主から再建に向けた言葉が出た。この日からいろいろなきことが動き出し、復活の日まで倍速で動いていったように感じる。

2023年12月14、17日には、北九州市で初めて開催された「北九州国際映画祭」の会場の一つとして、北九州市出身の青山真治監督の追悼特集上映などが小倉昭和館で行われた。同じく北九州市出身で小倉昭和館にもゆかりのある俳優の光石研さんや監督のタナダユキさん、シネクラブサポート会の署名活動に快く協力してくれた俳優の尚玄さんが復活したステージに立った。

11月22日には、火災から再生までを追った完全ドキュメント『映画館を再生します。小倉昭和館、火災から復活までの477日』（四六判変型並製カバー装・168頁）が文藝春秋から刊行された。館主の樋口さんの言葉が、聞き書きでまとめられており、私たちが知らない裏側でどれだけ館主が苦悩してきたのかを思い知らされた。背負った大きなものにつぶされることなく、再建を決断してくれたことに改めて感動を覚えた。

火災で小倉昭和館を失い、モノクロームの映画のようだったまちの景色が、小倉昭和館の復活と共に再び色付き、カラー映画の上映がスタートしたように感じる。一つの時代が終わわり、またここから一つの時代が始まる。その歴史的瞬間に立ち会えたことをうれしく思う。

（友の会理事・植田詩生）

### 1面から続き

今回は、これらの場所を巡りながら、若戸渡船の渡場や恵美須神社の御乗船地碑にも立ち寄りしました。参加者の方からは次のような感想をいただきました。

- ・多世代が集まって、みんなでわいわい楽しみなが歩くことができました。気が付いたら1万歩くらい歩いていました。
  - ・普段気にかけない街の中にも、いろいろなゆかりの場所があることに気づきました。
  - ・自分でもまた歩いてみたい。またこうしたまち歩きイベントをぜひ実施してほしい。
  - ・初めての試みですが、宗左近さんをテーマにいろんな人と交流ができて楽しかった。
  - ・文学館友の会に入りたいと思った。
- 今回、ご好評をいただくことができましたので、これからもこのような企画を継続していこうと考えております。また当日は、小学生から高齢の方まで幅広い世代の方々にご参加いただきました。世代を越えた楽しいおしゃべりができたことも収穫の一つでした。
- 今後は、お子さんやお孫さん連れでのご参加を呼びかけるなど、世代間での交流にも力を入れていきたいと思っています。